

D. H. Lawrenceの社会的観念と「他者」*

染 谷 昌 弘

1. はじめに

D. H. ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) の作品を読む場合、とすると、彼の個人的、内面的な思想のみが目につき、その社会的な観念を見逃してしまいがちになる一般読者は多いはずである。それは、ロレンスが紛れもなく文学者であったからに他ならず、文学者はその社会的な観念を作品という虚構の中で展開し、その中で解消し、完結するものだからである。英国の批評家レイモンド・ウィリアムス (Raymond Henry Williams) は、ロレンスの「社会的観念をあらわしている評論や書籍の分野での彼の一般的作品は、実は小説から切り離したりそれとは別に判断したりすることができない」(199) と述べている。

しかしながら、作品に現れる彼の文学的な態度は、社会的背景に対する強い反応の所産であることは論を俟たない。ロレンスは、彼自身が労働者階級の家庭に生まれ、あまりにも直接に産業主義の悪弊を浴びたために、

* 本稿は、日本英語英文学会第24回年次大会(2014年3月3日、於: 東京外国語大学本郷サテライト)での発表、「*St Mawr*におけるロレンスの社会的観念」の内容に加筆、修正を加えたものである。当日、司会を務めてくださり、発表の内容に有益な質問、コメントをいただいた加賀岳彦氏(日本女子体育大学)、また、会場での聴講を賜わり、質問、コメントを頂いた各氏に対して、この場を借りて感謝申し上げます。また、編集委員長の野村忠央氏(北海道教育大学旭川校)、および、匿名の査読委員お二人に深く謝意を表す。尚、残る不備・遺漏は筆者一人に帰せられるべきものである。

ウィリアムスの言葉では、「あまりにも多くを知りすぎ」たために、実際には、自国の社会を離れ、「逃避する以外になしうることはほとんどなかった」(205) ののである。彼は、「世界の工場」たる産業主義社会の英国から逃走して、いわば世界を「放浪」しながら、文学者として、内省と意識の拡大の果てに、新しい人間関係に基づく、故郷の英国が失ったある社会形態を作品の中で夢見たのだと言える。ウィリアムスは、さらに、「社会的価値についてのわれわれの思考に及ぼしたロレンスの重大な影響を知ることは容易である」(199) と述べ、ロレンスの社会的観念の重要性を指摘している。また、F. R. リーヴィス (F. R. Leavis) は、「社会的環境の透視的な理解」(234-5) と『セント・モーア』(*St Mawr*¹, 1925) の特徴を挙げている。『セント・モーア』には、同時期の他の作品、例えば、第一次大戦後のニヒリズムに陥っている人々の心理を深く洞察した『アロンの杖』(*Aaron's Rod*, 1922) などとともに、ロレンスの社会観念が最も色濃く表現されている作品の一つである。

本論は、1925年に脱稿されたロレンスの中編小説*St Mawr*と、同じく同時期に書かれたエッセイ群をテキストにして、第一次世界大戦後の帝国主義という激動の時代を生きたために、とかく誤解を生んできたロレンスの社会的観念を、作品やエッセイに使用される「ファシズム」、「デモクラシー」、「共同社会」などを考察することによって明らかにし、さらに、それらの観念を根底から支える「他者」(otherness) を浮き彫りにしようとするものである。

2. ファシズムの忌避

アメリカ女性のルウ (Lou Witt) が、オーストラリア人の夫のリコ (Rico)、母親のワイト夫人 (Mrs Witt) たちと、ヒースの茂る野原に乗馬会に出かける場面がある。リコは、セント・モーア (*St Mawr*) というタイトルと同名の馬に乗り、会話をしながら歩を進めていたが、このときこの馬はある失態を犯すことになる。この失態は、20世紀のファシズムが犯した大失態の比喩となっていると考えられる。セント・モーアはヒースの茂みに隠れて死んでいた蛇に驚き、後ろ足で立ち上がる。リコは手綱を締め馬を制御しようとしたが、馬から落ち、ついには馬が彼の上に倒れ掛かり、大

けがを負う。結局のところ、リコには雄馬を乗りこなすだけの能力がなかったのである。リーヴィスはその能力を「その馬をのりこなすことのできる十分な思考力をもった男の知性」(234)と解説している。現代人は、馬を上手に乗りこなすための、ロレンスの言う「炎」のような思考力と知性を喪失している。このことをロレンスは、ルウと母親のウィット夫人との会話のやりとりを通して、以下のように表現している。

“Why can't men get their life straight, like St Mawr, and then think? Why can't they think quick, mother: quick as a woman: only farther than we do? Why isn't men's thinking quick like fire, mother? Why is it so slow, so dead, so deadly dull?” (321)

“We have no minds once we are tame, mother.” (322)

リコがセント・モーアを乗りこなすことができなかったのは、まさしく彼が、当時の社会によって、「飼いならされた」現代人であり、「炎」のように立ち上がってすばやく「しゃんと立て直す」知性を、「まっとうに考える」思考力を喪失した現代人であるからに他ならない。自分の体の下の馬の全生命を受け止める感受性と、偏ることのない全一な思考力を動員して情報を集め、それによって馬を駆る能力が、現代人のリコには喪失していたのである。リコは現代人の知性偏重主義の弊害を蒙った、典型的存在であったと言える。リコには馬の生命全体を感じとる感受性と直観力が欠如していた。一方、馬は当時の社会の中では抑圧されている生命の衝動を表象している。この第一次世界大戦直後の状態では、人間の生命の衝動は、「まっとう」ではない非道な抑圧を受けていた。セント・モーアが、死んだ蛇を見て驚いて、後ろ足で立ち上がったのは正当な行為である。この時乗り手がすべきことは、手綱を引いて強制的に体勢を立て直そうとするのではなく、逆にそれを緩めて、馬の止むに止まれぬ蛇に対する反応をそのまま見守り、受け入れるべきだったのである。リーヴィスの解説の通り、リコは「自分の体の下の生きた感覚を盲目に残忍に無視」(239)したのである。さらに、セント・モーアの失態の描写はこのように続いている。

It was something horrifying, something you could not escape from. It had come to her as in a vision, when she saw the pale gold belly of the stallion upturned, the hoofs working wildly, the wicked curved hams of the horse and then the evil straining of that arched, fish-like neck, with the dilated eyes of the head. Thrown backwards, and working its hoofs in the air. Reversed, and purely evil. (341)

リコは、強制的で偏狭な意思でセント・モーアを支配しようとした結果、馬は「仰向け」になって、「不吉」さを漂わせるように「目を大きく見開いて」いる。リコの偏狭的な強制を受けたセント・モーアのこのような姿は、「純粹に悪そのもの」の姿であると形容されている。

「不吉」という言い方は、ロレンスがこの小説を書いた1920年代中頃から、第二次世界大戦の終結に至るまでの、世界の激しい動向を示唆している予言的な言葉である。それは、第一次世界大戦で敗戦したドイツ、イタリアなどのいわゆる「持たざる国」が、焦燥感とともに開始したファシズムの時代の到来である。そして、馬に失態を犯させたリコは、ファシズムの指導者の象徴であると考えられる。

Try fascism. Fascism would keep the surface of life intact, and carry on the undermining business all the better. All the better sport. Never draw blood. Keep the haemorrhage internal, invisible.

And as soon as fascism makes a break — which it is bound to, because all evil works up to a break — then turn it down. With gusto, turn it down. (341-2)

「ファシズムを試しにやってみよ」と言っている。もちろん、これは、「やってみたら、大変なことになる」という意味である。ファシズムは、リコが駆ったセント・モーアと同じように重大な失態を犯すと、ロレンスは、20世紀のナチスドイツの大失態を予言する言説を奇しくもここで行っている。そして、ファシズムの指導者についての描写は、以下のように続いている。

Mankind, like a horse, ridden by a stranger, smooth-faced, evil rider.

Evil himself, smooth-faced and pseudo-handsome, riding mankind past the dead snake, to the last break.

Mankind no longer its own master. Ridden by this pseudo-handsome ghoul of outward loyalty, inward treachery, in a game of betrayal, betrayal. The last of the gods of our era, Judas supreme! (342)

この「邪悪な騎手」とは、直接にはイタリアの独裁者のムッソリーニ (Benito Amilcare Andrea Mussolini) やヒトラー (Adolf Hitler) を指すと考えられる。ロレンスは、いよいよファシズムの大嵐が吹き荒れる直前の1921年まで、イタリアのシチリア島に滞在していたのである。リコに似た「えせ美男子」、つまりムッソリーニやヒトラーが、人類という馬を駆って、「最後の失態」、つまり、第二次世界大戦のファシズムが犯したホロコーストという大失態に向かってしていると予言している。セント・モアの失態の逸話は、執筆から20年後のナチスの大失態の予言と同時に警告ともなっている。以上のように、明らかに、ロレンスはここで、ファシズムを否定する言説を行っているのである。

しかし、ロレンス作品の中に、ファシズムを肯定する要素を看取する研究者が少なからず存在することは事実である。例えば、バートランド・ラッセル (Bertrand Author William Russell) は、ロレンスの当時の言動について、「彼は政治家たちが気づく前に、ファシズムの全哲学を展開していた」(104) と述べ、さらに、ロレンスの「血の意識」という考えは「アウシュヴィッツに直結する」(107) と酷評している。だが、このような極論に対しては反論する余地が十分残されている。それは、第一には、当時の世界の社会動向が、必ずファシズムと何らかの関係をもっていたこと。第二には、ファシズムという言葉にはあまりにも意味の幅があり、単に保守主義的であるという理由だけで、攻撃の対象とされる場合もある²こと。第三には、最も重要な点として、ロレンスは根本的に二元論を奉じていたということである。

この第三の要素は、ロレンス文学の精髓である。ロレンスの核心的な思想であるこの二元論は、光と闇、生と死、創造と破壊、愛と憎しみ、自由と権力、デモクラシーと独裁制 (ファシズム)、官能性と精神性、欲望と意志、意識と無意識などそれぞれの二項の対立が、そのまま切り離されずに

一対のものとして平衡を保ち、一つの中に内在しているとする思想である。ロレンスは、大きくヨーロッパ文明が危機に瀕しているのは、これらのどちらか一方を強く意識し、もう一方、ロレンスの言葉では「他者」を取敢然と無視して、偏狭に陥っているからであるという文明観を抱いていた。従って、仮に、ロレンス作品にファシズム性を看取できたとしても、それはこのように対立し、対となっている二項のうちの一つの側面のみを見ているに過ぎない。ロレンス作品におけるファシズム性の指摘は、この点から、一面的に過ぎる見方であると言える。ここでの詳細な言及は避けるが、私たちは、ロレンスのエッセイ『王冠』(*The Crown*, 1915)³からこの二元論を認知することが十分可能である。

また、ロレンスの二元論がファシズムを忌避する思想であり、ラッセルの批判が文字通りに、一面的であることの根拠となるものとして、マックス・ホルクハイマー (Max Horkheimer)、テオドル・アドルノ (Theodor Adorno) の共著『啓蒙の弁証法』(*Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, 1947) を挙げるができる。この論集では、何故、人類はアウシュヴィッツを経験して、真に人間的な状態に踏み入っていく代わりに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか。何故、理性的文明がその反対物へと転化していくのか。そのパラドックスの構造を論じている。ナチスが、偏狭にそして純粋に押し進めた知的合理性は、皮肉にも、まさにその一極に振れた純粋性が原因となって、逆に、踵を返して、背反する野蛮性へと振り返り、その陥穽に落ち込んで行ったと分析している。このように、絶えず一元的な思考に留まろうとし、それに基づいて行動することが、ナチスの最大の誤謬であった。『啓蒙の弁証法』では、このパラドックスを「否定的弁証法」と呼んでいる。そして、ロレンスの二元論は、このナチスの「否定的弁証法」を本質的に忌避する思想として働いている。その思想は、相反する二つの要素を同時に保持し、平衡、均衡を保つ、両極的で全一的な「生」そのものであるからなのである。また、『啓蒙の弁証法』が論証しようとしたことは、ここでの詳細な論考は避け、後の機会に論じる積りだが、ポスト構造主義の理論家デリダ (Jacques Derrida) の「脱構築」の理論⁴と通じるところが多いと考えられる。それは、ある概念がそれとは正反対の、それが排除している概念によって逆に寄生され、密かに支えられ活性化されている。そして、対立する両者は、実は、「流動性」、「決定不

可能性」を持つ、という二元論の構造の論証である。以上のように、ラッセルが、ロレンスの言動にファシズムの要素をだけ汲み取ったのは、ロレンス作品の二元論的な「他者」が内在する「生」の全一性 (wholeness) という本質を無視し、一元的な洞察を施した彼の誤謬であると判断できるのである。

ロレンス作品がファシズムの色合いを帯びていると指摘されるもう一つの理由に、彼の「指導者原理」の思想を挙げることができるであろう。後の章で論じる、ロレンスの理想とする共同体ラナニムは、指導者 (leader) の存在を必要としているが、それはヒトラー的な指導者とは一線を画すものである。加藤英治は、「ヒトラー的「指導者」の本質はその「非超越性」にあるが、ロレンス的「指導者」の本質は「超越的な力が未知の世界から与えられていること」である (246)」、と述べている。ヒトラー的指導者の特徴は、民族共同体の夢を政治的に実現するその「非超越性」にある。一方、ロレンスにとっては、「非超越性」は社会的な混迷の時代に忍び寄る偽りの力であった。ロレンスは、指導者が保持する力は愛と同じように至高のものである、と考えていた。ロレンスには民族共同体の夢を政治的に実現する使命はほとんど存在しないと言ってよい。ロレンスは文学者であり、そもそも彼は当時英国からの逃避をはかっていたのである。ロレンスは、エッセイ *Blessed Are the Powerful*, 1925 において、自らの限界を超えた「他者」性を帯びた指導者的存在との接触によって、本当の力を得て、十全なる生を生きることが必要であると主張している。

Life enters us from behind where we are sightless, and from below, where we do not understand.

And unless we yield to the beyond, and take our power and might and honour and glory from the unseen, from the unknown, we shall continue empty. (440)

ロレンスにとっての「力」ある「指導者」とは、「見識の及ばぬ」彼方からのものである。この「超越的な指導者」においてもまた、私たちは「他者」の観念が基底で働いていることを看取することができる。それは、ムッソリーニやヒトラーのような、民族共同体の現実的な夢を実現する、独裁的

な政治的「指導者」とは性質を異にするものである。小説のタイトルの *St Mawr* の「聖」は、このような超越性を含意していると考えられる。

以上のように、ロレンス作品のファシズム性の指摘に関しては、ロレンスにも多々誤解を生む要素は認められるが、少なくとも、その多くが一面的に過ぎる見解であると言えることができる。ロレンスはファシストどころか、逆に、社会的な混迷の時代に「力」を喪失した社会が、激しい焦燥から、ファシズムという誤った方向に一方的に傾倒してゆくことに、大きな危惧を抱いていたのである。「他者」を志向するロレンスの二元的な思想は、本質的に一元的なファシズムを忌避するものであった。

3. 「新しい」民主主義

St Mawr には全部で5か所 *democracy* あるいは *democratic* の語が使われているが、1か所を除き、すべて登場人物のウイット夫人の自負を表す描写の中に、これらの言葉が使われている。ルイジアナ州、ニューオーリンズ市出身で第一次世界大戦中の従軍看護婦であったウイット夫人は、作品の中で馬のセント・モーアに匹敵する主要な意味合いを持たされている。彼女の故郷であり、この小説の結末の舞台である、当時のアメリカ合衆国の民主主義的な価値と、ウイット夫人の言動とは重なるところが多い。小説は、産業主義によって「汚された」文明が、アメリカの粗野で野蛮な自然におおわれた牧場の生活によって、清められ再生を遂げ、そこから生まれる創造的な生活を暗示して終わることになる。

St Mawr の脱稿より6年前の1919年に書かれたエッセイ *Democracy* の中で、ロレンスは民主主義に対する自らの考えを表明している。

The living self has one purpose only: to come into its own fullness of being, as a tree comes into full blossom, or a bird into spring beauty, or a tiger into lustre.... The only thing man has to trust to in coming to himself is his desire and his impulse. (714)

So, we know the first great purpose of Democracy: that each man shall be spontaneously himself — each man himself, each woman herself, without

any question of equality or inequality entering in at all; and that no man shall try to determine the being of any other man, or of any other woman. (716)

以上は、いずれもワイト夫人の言動と軌を一にしている民主主義の思想の基本を述べている。中でも、「各人は自発的に自分自身たること」は、民主主義の第一の目的であるとしている。特に、最後の「他のどんな男や女の存在をも決定しようとしてはならない」は、民主主義という社会原理の根幹を成すと彼が考えていた重要な原理である。ロレンスは、これらの基準に従って、社会的諸行動をする必要性を述べている。以上の点からは、確かに彼は、ワイト夫人と軌を一にする民主主義信奉者ということが言える。

しかし、次に挙げる同じ *Democracy* 中の「平均人」や「平等」という言葉で、彼は「現代」の民主主義の限界を指摘している。

Society means people living together. People must live together. And to live together, they must have some Standard, some *Material* Standard. This is where the Average comes in. And this is where Socialism and Modern Democracy come in. For Democracy and Socialism rest upon the Equality of Man, which is the Average....For Society, or Democracy, or any Political State or Community exists not for the sake of the individual, nor should ever exist for the sake of the individual, but simply to establish the Average, in order to make living together possible:....Everything beyond that common necessity depends on himself alone. (701)

「社会とは人々がともに生きることによって成り立つ。人間はともに生きざるをえない。そしてともに生きるには、何らかの基準が、何らかの物質的基準が要る。そこで平均人が登場する」と言う。そして、「現代の民主主義」では、この「平均人」が「平等」の代名詞になっている。この「平均人」は、単独で唯一の「個人」を酌量、斟酌するものではない。つまり、現行の民主主義においては、私たちは、本質的には平等ではないということになる。人々がともに生き、基本的な「物質的」必要性を満たすときに

のみ、私たちは偽りの「平等」である「平均人」となるのである。私たちは「平均人」に還元できない、個人に属する一切のものは、自分自身で単独で孤独に守り通さなくてはならない。このような近代民主主義社会が孕む個人の孤独をどうしても引き受けざるを得ないのである。この制度では、暖かな共感というものがどうしても欠如することになる。ロレンスは、率直に、民主主義という社会制度の内奥に潜む矛盾や限界を彼らしく、やさしく言い表している。

また、同じエッセイ *Democracy* でロレンスは次のように述べてもいる。

We cannot say that all men are equal. We cannot say A=B....

Where each thing is unique in itself, there can be no comparison made. One man is neither equal nor unequal to another man. When I stand in the presence of another man, and I am my own pure self, am I aware of the presence of an equal, or of an inferior, or of a superior? I am not. When I stand with another men, who is himself, and when I am truly myself, then I am only aware of a Presence, and of the strange reality of Otherness.... Comparison enters only when one of us departs from his own integral being, and enters the material-mechanical world. Then equality and inequality start at once. (715-6)

「傍らにいる人がその人自身であり、わたしも本当の私自身であるとき、私が意識するのは一つの存在であり、他者という不思議な実在だけである」と述べている。ロレンスの「他者」という概念は、何度も述べたとおり、彼が生涯抱き続けた作品の中心的なテーマである。それは、星の均衡状態のように、自らの孤独を保持しながら、同時に他の星との引力関係を失わないという二元論である。「他者」とは数学的、抽象的に容易に知ることができる存在である一方、感じ取ったり、直観することでしか把握することができない、「不思議な知られざる実在」という側面も保持している。既存の民主主義の礎となる「平等」は、人間の生のこのような「十全な在り方」を保障するものではない。本来、別個の十全な存在である「他者」とは、比較したり評価し合ったりすることは不可能なのである。「平等」や不平等という比較が成立するのは、人々が自分の十全な在り方を放棄して、単に、

物質的、機械的な関係に自らを限定する場合のみである。このように、民主主義は物質的な要求を満たすためだけに存在するいわば不完全な制度であるとロレンスは主張しているのである。

レイモンド・ウイリアムスは民主主義の限界を指摘し、それに否定的な言説を繰り返したロレンスに対し、「ロレンスは、他の誰よりも明瞭に、彼自身が道を誤った場所をわれわれに見せてくれている」(211)と批判している。しかし、果たしてそうだろうか。ロレンスは道を誤っているのだろうか。ロレンスの「民主主義批判」は今日でも見られる、正当な批判であろう。それは、「現代」の民主主義という不完全な制度自体にその批判の種がすでに存在しているからである。私たちは、不完全な民主主義を容認し、例えば、日本の政治思想家、丸山眞男の言うように、「大日本帝国の「実在」よりも戦後民主主義の「虚妄」の方に賭ける」(585)しかないのだとしても、それは何も民主主義の欠陥に目をつぶることを意味しないだろう。真の平等が民主主義の原理であるとすれば、既存の民主主義はロレンスにとっては、虚偽なのである。ロレンスの「新しい」民主主義は、血の通った、親密な、そして有機的な人間関係に信を置きながらも、超越的な指導者を頂点とするヒエラルヒーを持つ共同体の中にある。ロレンスの民主主義の基底にある二元論は、星の均衡のように、「自己」を堅固に保持しながら、同時に「他者」という星々との引力関係を失うことがない、というものである。この二元論は、「自分の生を最高度に生きること」、「各人は自発的に自分自身たること」という彼の民主主義の定義の背後にあり、その根拠ともなっている。そして、同時に、私たちが「自分の生を最高度に生きる」には、「他者」が必要不可欠なのである。また、ロレンスの二元論、「星の均衡」は、彼が民主主義の根幹として先に挙げた、「もう一人の人間の存在を決定しようとしてはならない」という思想とも本質的に符合するものである。私たちは、自分の生を「最高度」に生きるにも、「自分自身たる」にも、「他者」の視点を持ち、全一性を堅持する二元を生きなければならない。ロレンスは、自分以外の人間や、また、何らかの超越的なものという「他者」と「自己」との理想的な関係性の実現をはかっている。理想的な「他者」との関係性は、各人の「生」を「最高度に生きること」を可能にする「新しい」民主主義の姿となって結実しているのである。

4. 共同社会ラナニム

ロレンスは、ラナニムという共同社会を構築するにあたって、ついに、既存の民主主義の概念との決別をはかることになる。1915年7月16日、彼はラッセルに現行の民主主義の限界に関しての書簡を送っている。ロレンスは、ラナニムには個人を超越する指導者的存在と、それを認識することができる、エリートが存在しなければならないと主張する。

...you must criticize the extant *democracy*, the young idea. That is our enemy. This existing phase is now in its collapse. What we must hasten to prevent is this young democratic party from getting into power. The idea of giving power to the hands of the working class is *wrong*. The working man must elect the immediate government, of his...work, of his...district, not the ultimate government of the nation. There must be a body of chosen patricians. There must be woman governing equally with men, especially all the inner half of life. (*Letters* 365)

現行の民主主義は「我々の敵」であり、それは崩壊の局面にある「未熟な民主主義」であると述べている。そして、男性と女性の「統帥者」(dictator)を頂点とするヒエラルヒー構造を基盤とする国家組織をロレンスは提示する。さらに、彼は、「労働者階級に全ての権力を任せることは誤りだ」と主張している。労働者階級は視野も狭いし、偏見に囚われがちで、知性にも浅いものがあるという見解を示している。つまり、労働者階級には「統帥者」というエリートが必要であると言うのである。このヒエラルヒーの構想は、ロレンスが労働者階級の家族で過ごした、幼年時代の豊富な経験と、成人後の中産階級としての経験との両方が基礎になっている。ロレンスは、労働者階級と中産階級のどちらの長所、短所も熟知していた。この労働者階級の人間関係の中に生じる互いの愛情の感覚、共感などがロレンスのラナニムの基底にあるものである。それは、知的で、冷やかな関係を強いるだけの中産階級の社会とは質を異にするものであった。この二つの要素を矛盾なく生かすために、労働者階級に教育的指導者を与えるという構想を立てたのである。このような意味で、超越的な「指導者的存在」と「統

帥者」というエリートの実用性は経験に基づいた、現実的、実際的な構想であると言える。

ロレンスの理想郷ラナニムは、コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) の「パンティソクラシィ」、英国の社会主義者のオーウエン (Robert Owen, 1771-1858) の「ニュー・ハーモニー」、ラスキン (John Ruskin, 1810-1900) の「聖ジョージ・ギルド」など⁵の理想化された共同体と同様に、当時の社会的な諸問題を乗り越えるために構想された、理想的な共同社会である。ロレンスにとって、当時の産業主義を基礎に置く既存の民主主義社会は、第一に人と人との自然な共感を失くし、平等の名のもとに互いの暖かな心の交流や共感を奪い去って、人間性の疎外と孤独を生む未熟なものであった。ロレンスは当時のこのような社会文明的な悪弊に抗して、ラナニムという理想的な有機的共同社会の創造を試みたのである。この共同社会の構想にも、前に述べた、彼の「他者」、「二元論」の概念が一貫して通っていることにあらためて気づかされる。ロレンスは、労働者階級には、超越的な「指導者的存在」と、エリート的存在の「統帥者」という「他者」との関係性が必要不可欠であると考えているのである。

5. おわりに

以上、「ファシズム」、「民主主義」、「共同社会」という三つの観点からロレンスの社会的観念を考察してきた。そして、それらの社会的観念には、ロレンスの核心的な思想である「他者」という概念が、貫通していることを見ることができた。*St Mawr*は1924年アメリカ合衆国のニューメキシコのデルモンテ牧場で執筆された。ファシズムの嵐が吹き荒れる中、ロレンスはアメリカの読者からの勧めで、ニューメキシコの地に招待され、一面の土地を提供される。ロレンスはこの場所で、第一次世界大戦後の帝国主義やファシズム、そして産業主義を第一に信奉する社会による卑劣な強制に抗して、疎外された人間性の回復を図り、「他者」との関係性を新たに打ち立て、ついには共同社会ラナニムを構想するに至った。ロレンスは労働者階級の家で青年期まで過ごした。そこには密接で生き生きとした有機的なつながり、「血の意識」によるつながりと愛着を持つ人間関係があった。この経験がラナニムの礎となった。それは同時にファシズムに通じるもの

であるとの誤解を生みもした。当時の民主主義社会は、この有機的な互いの繋がりを抽象的な「平均人」や偽りの「平等」という概念によって分断するものであるとロレンスは考えていたのである。ルウが物語の最後で、アメリカの野性的な牧場で夢見た生活は、ロレンスの『虹』(*The Rainbow*, 1915)の結末の如く、「薄汚れた産業主義を一掃」(548)する、創造的な共同体というユートピアであった。

果たして、ロレンスが構想した共同社会は、私たちが生きる21世紀の社会の未来に立つものなのであろうか。少なくとも、彼の「自己」と「他者」との関係性の概念は、分断されて、孤独になりっている個々人を、「生」という全一性を介して、再び繋ぐ可能性を含んでいると言える。ロレンスの「他者」は、現代文明が孕む人間性の疎外に対して、何らかの解決への示唆を、「外」から、顕示する可能性があるのである。何故なら、「他者」への志向は、それ自体が、社会的観念の本質と呼ぶべきものであるからである。今後、「他者」という観点を中心に、ロレンスの他の作品を「再再読」することによって、ロレンス文学の新しい眺望を、現代を基点として、とらえ直すことができるのではないかと考える。

注

1. 小説のテキストは、Lawrence, D. H. “St Mawr.” *The Complete Short Novels*. Ed. Keith Sagar and Melissa Partridge. London: Penguin, 1990. 276-428を使用した。尚、引用ページ数は同書のものである。
2. このことに関しては、山口定『ファシズム』を参照した。
3. 例えば、その一説に、「この戦いは休息もなければ終わりもない。なぜなら、この戦いは、われわれが生まれながらに持っている、内なる対立の結果生じたものだからだ。この対立を取り除けば、破滅が訪れ、われわれは突如として粉々に砕け散って、宇宙の無の中へ消散霧消してしまうであろう」とある。
4. 高橋哲哉『デリダ——脱構築』によると、現代思想系統図において、ホルクハイマー、アドルノ、デリダの三人は影響及び対立関係にあるとしている。
5. これらの、他の作家たちが構想した、共同体については、(*Culture and Society*, 212)を参照した。

参考文献

加藤英治「D.H.ロレンスと『指導者原理』」『D.H.ロレンスと現代』日本ロレンス

- 協会編、東京：国書刊行会 1995年、240-248ページ。
- 高橋哲哉『デリダ——脱構築』東京、講談社、2003年。
- ホルクハイマー、マックス、テオドール・アドルノ『啓蒙の弁証法』徳永恂訳、東京、岩波書店、2013年。
- Horkheimer, Max and Theodor Adorno. *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*. Amsterdam: Querido, 1947.
- Lawrence, D. H. “St Mawr.” *The Complete Short Novels*. Ed. Keith Sagar and Melissa Partridge. London: Penguin, 1990. 276-428.
- . *The Letters of D. H. Lawrence*. Ed. George J. Zytaruk and James T. Boulton. Vol. II. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- . “Democracy.” *Phoenix*. Ed. Edward D. McDonald. London: Penguin, 1936. 699-718.
- . “The Crown.” *Phoenix II*. Ed. Warren Roberts and Harry T. Moore. London: Penguin, 1936. 365-415.
- . “Blessed Are the Powerful.” *Phoenix II*. Ed. Warren Roberts and Harry T. Moore. London: Penguin, 1968. 436-443.
- . *The Rainbow*. London: Penguin, 1989.
- Leavis, F. R. *D. H. Lawrence Novelist*. London: Chatto, 1955.
- 丸山眞男 増補版への後記『現代政治の思想と行動』東京、未来社、2006年。
- Russell, Bertrand. *Portraits from Memory and Other Essays*. Nottingham: Spokesman, 1995.
- Williams, Raymond. *Culture and Society: 1780-1950*. New York: Columbia UP, 1983.
- 山口定『ファシズム』東京、岩波書店、2006年。

(東洋大学非常勤)
some@ja3.so-net.ne.jp